

日本語教育と異文化伝道 ③

CA と AL

日本語教育関係者なら、すぐにピンとくるアルファベットだが、「キャビンアテンダント」と「エアライン」というような航空関係の話ではない。「CA」というのは「Communicative Approach」、「AL」というのは「Audio-lingual method」の略である。この二つが日本語教育の世界では何度となく論争を巻き起こしていた。筆者が日本語教育に携わり始めた1980年代中頃以降、「コミュニケーションティブアプローチ」という言葉が盛んに言われるようになった。従来からあるオーディオリンガル法に取って代わる新しい教授法のように思われてもいた。厳密には「アプローチ」と「メソッド」という違いもあり、比較すべきものでもないのかもしれないが、「CA」の波は当時、日本語教育界に大きな影響を与えていた。まるで江戸末期に來た黒船のような印象だと言っても過言ではない。なぜなら今まで積み上げてやってきたことが否定され、これこそ新しいやり方だというような風潮があったからである。

これはえんぴつです

今どき、「This is a pen.」で始まる英語教科書はないと思うが、読者の皆さんは次の主張をどう思うだろうか。

- そんなのは実際の会話では使うこともない文だ。それを何度もしゃべらせて英会話が一つもできなかった。
- 目の前に鉛筆があり、話し手も聞き手も鉛筆であることを認識し、話し手が鉛筆を手にとって、聞き手に対して「これはえんぴつです」と言うのは不自然だ。
- 「これはえんぴつです」は構文を示すための文であり、「えんぴつ」の部分「田中さんの鉛筆」とか「図書室の本」というように入れ替えれば、十分に会話の中の文として成立するから、不自然でも何でもない。
- 先生の指示に従って、反復、入れ替え、拡張、応答というような練習ばかりしていても反射的に反応する練習ばかりで、実際に話せるようにはならない。自発的に文を作って話すわけじゃないから会話では役に立たない。
- コミュニカティブな授業とはいったい、基礎的な単語や構文をしっかりと練習して積み上げていかなければ、間違いだらけの文しか言えなくなるではないか。

どれもこれも一理あるようで、自分の英語学習の経験なども踏まえて考え込んでしまうことばかりではないだろうか。以前、この連載の中でLL(Language Laboratory)や文型積み上げ式の授業について述べ、留学生から「学校では先生の日本語がよくわかるけど、一歩外へ出たら日本人の話す日本語がわからない、習った日本語が使えない」と言われたエピソードを紹介したが、その経験からも「CA」に関しては関心を持たざるを得なかった。

パリでの経験

1990年にパリへ派遣された時、生活に必要な会話ぐらいはできるようにアリアンス・フランセーズに通わせてもらった。ヨーロッパでは「CA」は語学教育ですすでに取り入れられていたようだが、教科書にはカラフルな絵や写真がたくさん取り入れられ、場面に応じて必要な会話が書かれており、わかりやすく自然な形で流れていくような印象があった。これがCA的なものなのかとも思っていた。当時、日本語教育ではこのような教科書はあまり

なかったようにも思う。どちらかといえば文字中心で語彙や文型、そして漢字、それらがちりばめられたダイアログなどで構成されているものが多く、挿絵などが時々入るぐらいだったように記憶している。2年後に帰国してからも日本では「CA・AL論争」が続いていた。しかし、「CA」に関しては具体的な教科書、教材などはたくさん開発されていたわけでもなく、理論的なことばかりが取り上げられていたような印象が強かった。学会などで論争されていただけでなく、多くの日本語教育機関の教師同士の間でも「ブチCA・AL論争」が行われていたのではないだろうか。

教科書批判

筆者がパリで『日本語の基礎』(スリーエーネットワーク)を使い、授業を行っている頃、日本では「CA」の台頭から、「AL」に対する批判があり、その代表的な教科書として『日本語の基礎』が批判の対象として挙げられていた。『日本語の基礎』は実習に來た技術研修生のための教科書であり、語彙の面などで確かに一般の日本語教育には適さない部分もあったことは認めるが、研修生が限られた期間で効率よく学んでいく上では非常に優れた教科書である。だからこそ多くの日本語教育機関で採用され続けてきたのであろう。この教科書批判については、松岡弘・五味政信編著『開かれた日本語教育の扉』(スリーエーネットワーク、2005年)の中で、鶴尾能子氏が詳細に書いているが(59~60頁)、当時、「CA」側からの批判はちょっと一方的なものだと筆者も感じていた。実際に『日本語の基礎』の開発に携わってきた人々にとっても、この批判は衝撃的なことだったと思う。しかし、この論争があったからこそ、多くの日本語教師が教授法について深く考え、自分の実践についても振り返ることができたともいえる。そして『日本語の基礎』は見直されて、『新日本語の基礎』に、そして技術研修生だけでなく一般向けとしてもさらに進化し、『みんなの日本語』として生まれ変わった。

共生的進化

教科書批判で思い出したことがある。遺伝子研究で有名な故村上雄氏は「生きとし生けるものは、すべて『我が身がかわいい』んです。『我が身がかわいがること』に対して貪欲であっても、いいんだと思います。しかし、それが限度をすぎ、全体のバランスが崩れた時、自分自身もイキイキできなくなる時が來ます。」と述べている(『遺伝子からのメッセージ』日新報道、1996年、82頁)。村上氏はまた、ダーウィンの進化論に対抗して出てきた共生的進化論を引用して、遺伝子の観点から、「共同・共生」「個性化・個別化」「闘争・競争」して、発展向上していくものだと述べている。社会や組織も、仲間内だけで「助け合い」をしているのはよいが、あまりにそれが長く続くと、いつしか「もたれ合い」になり、競争のないイキイキしない社会になり、「平等」がいつしか単なる「横並び」になり、個性のないものばかりになってしまうと述べている。その時、競争や闘争が必要になるが、一方で「競争」ばかり続けていると、今度は「譲る心」のない殺伐とした社会になっていくともいう(84頁)。村上氏が言うことは、教科書や教授法にも、学校という組織にもあてはまりそうだ。これらが発展するためにはバランスのとれた共生的進化が必要ではないだろうか。